



ミャンマーでの「リハビリテーション強化プロジェクト」の中間レビュー調査で、ミャンマー側の関係者と打ち合わせ(左手前)

## 「障害者があるのままで 楽しめる社会」を実現させたい

JICA 人間開発部の西村愛志さんは、障害者がより参加しやすい社会づくりのため、彼らのエンパワメントに向けた研修やプロジェクトなどを通して障害者支援分野に携わっている。

### 大

学時代は中国語を専攻し、よく旅行で中国各地を訪れていました。そのたびに出会ったのが、障害を持った人たちが物ごいをする姿でした。私も生まれつき右手に軽度の障害があるのですが、物ごいをする人々の中には、私と同じような障害の人もいました。そんな状況を見て、「どういふことなのか」と疑問に思ったことがきっかけで、障害者支援分野の国際協力に取り組みたいと考えるようになり、JICAに就職しました。

最初に障害者支援に携わったのは、3年目。JICA 東京で行われている集団研修「障害者リーダーコース」の担当になった時でした。この研修は、開発途上で障害者のリーダーとなる障害当事者に、日本の経験を共有し、自分たちの国で障害者の地位向上を目指してもらうことが目的です。研修の実施機関と協力して内容の企画・運営・評価を行うのが私の仕事でしたが、私自身も障害を持つ当事者であることが、専門性となり、それまでの何気ない自分の経験も障害者分野の支援に生かすことができるのではないかと気付かせてくれました。これが障害者支援にもっと取り組みたいと考えるきっかけになったと思います。

次に配属になったネパール事務所では経理と総務を担当していましたが、JICA 東京で担当した帰国研修員との縁もあり、障害を持つネパールの人々と交流することができ

きました。この時、障害当事者という共通点があると同じ思いを共有できることが多く、国籍を超えて、仲間であると感じられる経験ができました。

その後JICA 大阪では、「中南米地域障害者自立生活」という研修コースを一から立ち上げたことが、大きな財産になっています。「自立生活」とは、障害者が家族と離れ、施設などに入らず、自らの意志でさまざまなことを決めながら地域のコミュニティで生活すること。研修員たちは日本の障害者運動

の歴史や介助者との関係性、ピアカウンセリング\*の方法など、さまざまなことを学ばわけてですが、この研修ではある新しい試みを取り入れました。それは、半分以上の日程を、自立生活をしている障害当事者のお宅にホームステイして過ごすことです。机上で学ぶ知識だけでなく、実際の自立生活を経験することで学ぶことは多いのではないかと研修実施機関と相談した結果でした。1日24時間学習が得られると、研修員たちからも好評でした。

現在は、JICAの障害者分野の支援全般を担当する人間開発部の社会保障課に配属されており、プロジェクトの企画やモニタリング、評価を行っています。その一つが、ミャンマーで手話通訳者の講師を育成する「社会福祉行政官育成プロジェクト」です。現在、ミャンマーには手話はあるものの、手話通訳



JICA 人間開発部  
高等教育・社会保障グループ  
社会保障課

西村 愛志

NISHIMURA Megushi

大学卒業後、1998年JICAに就職。青年海外協力隊事務局、JICA東京、ネパール事務所、JICA大阪などを経て、2010年7月から現職。

者はいません。そこで、手話通訳者を育成するためにも、ろう者を中心とする講師の育成を目指しています。

また、JICAの障害者分野の支援全体を今後どう進めていくか、指針を検討する仕事も行っていきます。例えば、障害者を主な対象とした研修やプロジェクトに加え、駅や建物のバリアフリー化などインフラ整備や教育分野でも障害者に配慮した内容を盛り込み、障害者が参加しやすい環境づくりを目指しています。



JICA大阪の「障害者自立生活」の修了式で(後列左端)

多くの人は、「軽々しく障害のことを語ることは避けた方がよい」と考えているかもしれませんが、しかし、障害について触れることをタブーとせず、障害はないほうがいいものというようなネガティブなものとして扱うのではなく、障害者が、障害者でよかったと障害そのものを楽しめる社会になるといいと私は思っています。そういう社会は障害者だけではなく、お年寄りや子どもなどを含め、すべての人にとっても住みやすい社会になるはずですよ。

\*ピアは仲間という意味。障害者に対して、同程度かより重度の障害を持った障害者が行うカウンセリングのこと。